

賃金労働

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/45171

5. 賃金労働

兼 子 肇

1. はじめに
2. 賃金労働の概要
3. 出稼ぎ労働
4. 労働と生活
5. おわりに

1. はじめに

今回の旧柳田村での聞き取り調査では、村の人々の仕事と生活について多くのお話を伺うことができた。旧柳田村での労働の中で、大部分を占めてきたのは農業や林業であることは言うまでもないが、その中で農業や林業に従事していない賃金労働者や、農業や林業の傍ら、賃金労働をする人々がいることもわかった。こうした人々は、村内の賃金雇用が限られているため、以前は出稼ぎに行く人が多かったが、村内においてはこうした状況を踏まえてさまざま雇用環境が作り出されてきた。例えば、昭和40（1965）年ごろからは各地に工場が立地しはじめ、経営者として工場にかかわる人も含め、盛んに村内外の人々が雇用された。この工場労働によって、冬場の収入源を手に入れる人や出稼ぎに行く必要がなくなった人もいるだろう。また柳田農業高等学校や村内に本部が立地する企業は旧柳田村の人々を雇用し、その生活を支えてきた。旧柳田村の人々にとって賃金労働とはいったいどのようなものなのだろうか。以下では賃金労働の沿革と聞き取り調査によって浮き彫りになった賃金労働と人々の生活の関係について記していく。

2. 賃金労働の概要

村内の仕事について聞いていると、旧柳田村内の働き口の少なさが浮き彫りになった。

Aさん（百万脇、男性、67歳）

若い人は、高校を出ると外に出てしまう。地元には働き口がないから。地元の働き口は役場、農協、学校の先生くらい。

Bさん（野田、男性、81歳）

かつては冬になると柳田村には仕事なくなり、トヨタなどに「出稼ぎ」にいった。そのため、冬になると人口が激減した。

Cさん（野田、男性、79歳）

19歳の時に金沢に出てきて、60代くらいまで働いた。田んぼもやっていたので、田植えがある繁忙期は柳田に帰ってきて田んぼの仕事をした。

こうした言葉から、賃金労働先数は今も昔も少ない状態であることが分かる。現在村の若い人たちは、外の大学に進学後、そのまま県外で就職することが多い。またかつては、出稼ぎという形で県外に働きに出て、農繁期には帰ってくるということが多かったようだ。このように、賃金労働先数は数が少なく、限られた人しか職に就けないのである。こうした状況はずっと変わらなかったのであろうか。

Dさん（野田、男性、69歳）

「むらのもちや」（旧柳田村内にある米穀店のもち販売店舗）は、平成12（2000）年から15年ほどやっている。働いているのは50~70歳の6、7人のお母さん方。朝5~6時からお昼後には終わるので、良い雇用ができたと思っている。

Eさん（石井、男性、79歳）

昭和40（1965）年ごろ、140人ほどが就労する繊維工場ができて、出稼ぎが減り、サラリーマンが増えた。

Bさん（野田、男性、80歳）

（工場経営を振り返って）出稼ぎをしなくてもいいようにという思いで工場の雇用をしていた。

このようなお話を聞くと、賃金労働は変化してきたことがうかがえる。企業を運営したり、商店を経営したりする方に話を伺うと、出稼ぎによって人が減るという事態を改善できないものかという考えの下から、雇用環境を作り出す試みが行われてきたことが分かってきた。以下では、業種別に賃金労働がどのような状態で存在してきたのかを聞き取りを踏まえながら、記していく。

2.1 工場労働

『柳田村史』（1975：722-723）によれば、昭和30（1955）年以降、日本全国の動きに合わせて石川県にも工業の発達による高度経済成長の時代がやってくる。しかし、工業の発展はいわゆる太平洋ベルト地帯を中軸として進められ、北陸はとかく置き去りにされ、なかでも能登半島の工業化は著しく立ち遅れたという。こうした状況の中で、旧柳田村は高度経済成長の波に若干遅れを取りながらも昭和40年代に「柳田村工場事業場設置奨励に関する条例」を制定し、繊維工業や弱電工業の工場が村内に立地した。

2.1.1 工場労働の始まり

- ・「柳田村工場事業場設置奨励に関する条例」の制定

昭和42（1967）年に制定されたこの条例は、「村内資源の開発と産業の振興を図るため、工場

又は事業場の新設若しくは増設を奨励し、もって村民の福祉を積極的に増進すること」を目的とし、工場又は事業場を新設若しくは増設した固定資産税の額が300万円以上か、常時従業員が10人以上のものに適用される。この条例が適用されると、5年間にわたり、固定資産税の100%ないし35%の奨励金を交付する（『柳田村史』1975：723）。

Bさん（野田、男性、81歳）

昭和42（1967）年に工場誘致条例が出されて、これをきっかけに様々な工場が旧柳田村にできた。縫製や電子など。固定資産税が5年免除されるなどのメリットがあった。工場によって地域発展を目指した。

この条例は、経済発展の勢いを村にも呼び込もうという意図で制定されたことが分かる。また、その結果いくつかの工場が村内に立地するようになったこともわかった。

・工場の立地

上記のように、昭和42（1967）年に「柳田村工場事業場設置奨励に関する条例」を制定してから5年で工場が立地し、条例の効果があったと考えられる。『柳田村史』（1975：724）によれば、昭和47（1972）年に調査地の1つである笹川地区に、通信機器具製造業の工場が1カ所、織物業の工場が2カ所あったことが分かる。

2.1.2 工場の実態

今回の聞き取りでは、旧柳田村に立地していた2つの工場の当時の実態を聞くことができた。工場での雇用と労働はどのようなものだったのか。聞き取りをもとにその実態について記す。

①柳田電機製作所（昭和46〔1971〕年～）

昭和46（1971）年から、電子機械メーカーオリオン電機（福井県越前市に本社を構える会社）の下請け工場として、柳田電機製作所では電子機器部品のはんだ付け等による部品製造が行われていた。

『柳田村史』（1975：730-734）によれば、従業者数は百数名で、農村人口の流出防止という過疎対策の一環として考えられていた。従業者の多くは女性であり、とくに30代の主婦が圧倒的に多かった。バスなどでの送迎もあり、広く村内から通うものがいた。

当時、製造担当だったFさんからお話を伺うことができた。当時は、農村ならではの苦労もあったようだ。

Fさん（笹川、男性、71歳）

昭和50（1985）年ごろオリオンの下請け工場では、170人～180人の従業員が働いていた。農作業をしていた婦人たちが、はんだ付けをするようになった。

農作業が忙しい時期、婦人たちは田植えで休む上に、結（田植えなど一時に多くの労働力を要する仕事をする際に、互いに人手を貸し合うこと）によってほかの田も手伝うため、仕事

が回らないこともあった。

主婦たちは、旧柳田村の主要産業である農業や林業の傍ら、工場で働いているため、特に農繁期は、農業に専念することが多く苦勞したようだ。しかし、このように賃金労働と家内労働を合わせて行うことは、旧柳田村のような農村の労働体系の特徴ともいえる。

②洛越織工場

昭和 41（1966）年に株式会社能登洛越織が創業した。工場生産での製織は柳田では初めてとなる工場だった。創業者である B さんにお話を伺った。

B さん（野田、男性、81 歳）

開業後、人員 25 名をチラシや口コミ、区長の推薦、工場の敷地の地主だった人たちから募集し、28 名で工場を開始した。その後、多い時には 50 人を雇用し、その多くは、20 代～30 代の若い女性で、嫁に来てすぐの女性も多かった。

①の柳田電機製作所同様、雇用者の多くは女性である。B さんはさらに、経営の際に気を付けたことを教えてくれた。

B さん（野田、男性、81 歳）

女性の多い職場だったために、人間関係には気を付けて、ひいきをせず全員を月 1 回社長室に呼び、ヒアリングをして人間関係の状態を把握していた。

最初は、農作業と並行して工場の仕事をしていた就業者たちの「来れるときに来ればいい」という考えから、田植えの時期と稲刈りの時期はすべての機械を稼働できず困った。しかし、次第に労働に皆がなじんでくるとまめに働くようになった。

女性が大半を占める職場では、やはり農作業と賃金労働が並行して行われていたようだ。工場が立地し始めた当時の人々にとっては、主とする農業の方が優先すべき労働であったことが分かる。しかし、B さんの根気強いヒアリングや意識改革のよって賃金労働も村の人々の中に定着していくことになったようだ。

2.2 土建業

2.2.1 高度経済成長期の盛況

高度成長期に全国で各種の土木工事や建設工事も活況を呈してくるが、旧柳田村においても、各種の建設業者が続出した。道路建設、河川改修農業構造改善事業などの公共事業も多く、鉄筋コンクリート工事や一般家屋の建設も目立って多くなり、大工、左官業も発達したという（『柳田村史』1975：737）。

今回の聞き取り調査においても土建業の当時の状況について聞くことができた。

A さん（百万脇、男性、67 歳）

柳田には、「土建業」が多い。多い時には 30 軒ほど建設会社があった。柳田は道が広く、土

建屋が多かったため、公共事業に取り組みやすかった。それゆえ、県下2番目に下水道が整備された。

Gさん（野田、男性、70歳）

柳田には、土建会社が30社ほどあった。県の補助金で90%以上が賄えるため、家がとても建てやすかった。

Hさん（米山、男性、84歳）

高校卒業後に（建設業者として）働き始めた。主に道路を作る。その他には山を削ってコンクリートを張る仕事があった。

Eさん（石井、男性、79歳）

高度経済成長期から昭和50（1975）年ごろに石井は、みんな瓦葺きへと立て替えた。それまで昭和30年代まではかやぶきだった。同時に2階建てにもなった。

表1 柳田村の土建業（昭和47〔1972〕年、単位：人）

	一般土木 工事	土木コンクリ ート工事	大工工事	瓦・屋根ふ き工事	左官工事	電気工事	計
日詰脇			・1				1
柳田	○1	・2、△1	・9	・1		・1	15
百万脇		△1			△1		2
重年			・1				1
石井		・1	・4		・1		6
笹川			・1				1
計	1	5	16	1	2	1	26

従業員規模： ・1～4人、△5～9人、○20～29人、出所：『柳田村史』1975：724より筆者作成

土建業者が多かったことや家や道路の工事が盛んに進んだことがうかがえ、賃金労働者の雇用の一部を土建業が担っていたことが分かる。聞き取りでは、特に昭和40年代後半から昭和50年代前半にかけての土建業の盛況ぶりを聞くことができた。土建業が多く立ち並び、雇用者も多かったようで、同時に旧柳田村内の昭和47（1972）年には下の表のように、今回調査地だけで26の事業所があったことが分かる。

また、従業者数も表のように示されており、正確な数字はわからないが少なくとも57人、最大で140人が土建業に従事していたことになる。一番事業所が多いのは、調査地である野田を含む柳田で、少人数ではあるが、大工工事の事業所が9つもある他、旧柳田村の中で2番目に従業者数が多い一般土木工事の事業者も立地している。

『柳田村史』には、婦人労務者がいっそう使用され、なかにはブルドーザーを運転する婦人の

姿も見られるようになったともあり（『柳田村史』1975：737）、労務者の主体が土建業においても工場労働と同じく、女性であったことが分かった。

2.2.2 現在の土建業

現在、土建業はその他の旧柳田村における賃金労働と同じく、衰退し、人手が足りない状況である。聞き取りでは土建業の現況についても話を伺うことができた。

A さん（百万脇、男性、67 歳）

仕事の性質上、重機の免許などいろいろな免許がいるがそれらを持っている人が足りない。若い人は外へ出ていくので、人手が足りない。

本社が金沢にあり、金沢基準の高い賃金をもらえるというので人気だった土建業者も今ではほかの土建業と同様に「人がいない」。

D さん（野田、男性、69 歳）

最近では、建設部門にインターンとして 10 日間ほど来る高校生もいるが、建設業は危ないので、雑務しかさせてあげられない。柳田の仕事に興味を持ち、残ってくれる若者を増やすのが課題である。

土建業は、高度経済成長期には多かった住宅建築や道路整備といった公共事業の数が減ると共に、仕事が減り、さらに労働人口の減少が原因で衰退していることが分かった。また、土建業の仕事の特殊性も人手の減少に影響していることも分かった。

D さんは現在旧柳田村にある建設会社の社長であり、現在の仕事についてもお話を伺うことができた。D さんは建設業だけでなく、様々な仕事や取り組みを行っているが、詳しくは「2.4 村内企業・商店」で記すこととし、ここでは建設業について記す。

D さん（野田、男性、69 歳）

建設の仕事はほとんど能登町の中で行い、基本的に公共事業の土木工事である。珠洲や輪島まで下請けをしたこともある。

社員は現在 40 人くらい。公共事業も人が住んでいるからこそ需要があるわけであり、人がどんどんいなくなることを危惧している。

現在は、従業員 40 人規模で業務を行い、公共事業の土木工事を主な仕事としているため、能登町に住む人が少なくなることに対して危機感を覚えているという。これまでも人手の減少によって衰退を余儀なくされてきた土建業にとって、更なる人口の減少は痛手である。

2.3 柳田農業高校・能登高校等教育機関

今回の調査地には、現在石川県立能登高校の柳田校舎や能登町立柳田小学校、能登町立柳田中学校がある。かつては、柳田農業高校も立地していた。これらの教育機関も賃金労働先の一つである。

2.3.1 教育機関の概要

・能登町立柳田小学校

能登町立柳田小学校は、明治7（1874）年に旧第八番学区々学校が改称される形で創設され（『柳田村史』1975：1060）、その後統廃合を重ね、現在の体制になっている。平成14（2002）年3月に旧当目小学校、旧黒川小学校、旧柳田小学校、旧小間生小学校、旧中斉小学校、旧上町小学校、旧合鹿小学校が閉校され、その翌月に旧7小学校と柳田小学校が合併したことにより、旧柳田村のほぼ全域を校区とする小学校になった。平成17（2005）年には、鳳至郡の能都町・柳田村、珠洲郡の内浦町が合併し「能登町（のとちよう）」が誕生すると、それに伴い「柳田村立柳田小学校」から「能登町立柳田小学校」となる。「柳田村立柳田小学校」は、石川県で最後の村立小学校であった。

・能登町立柳田中学校

能登町立柳田中学校は、戦後の教育改制により昭和22（1947）年に誕生し、昭和26（1951）年に当目中学校・上町中学校と統合し、現在に至る。能登町立柳田小学校からの進学先である。

・石川県立能登高校柳田校舎（旧柳田農業高校）

石川県立能登高校は、能登町宇出津に本校舎を構える高校であり、柳田校舎は分校舎である。柳田校舎は旧柳田農業高校が立地していた同地に立地している。

旧柳田農業高校は農業・畜産・園芸などの従事者を育成する学校である。村と密接な歴史を持ち、昭和42（1947）年には大型自営者育成農業高等学校として文部省の指定を受け、近代設備が整備される（『柳田村史』1975：1100-1102）と同時に当時の旧柳田村の人々の賃金労働先として農業の技術を持った人々を教員や助手として雇うこともあった。

2.3.2 教員としての雇用

今回の調査では、実際に旧柳田村の教育機関の教員として働いていた方に聞き取りをすることができた。

Gさん（野田、男性、70歳）

柳田農高で教員をしていた。柳田農高で学んだ知識や農家としての知恵を買われていた。

Jさん（笹川、男性、85歳）

学校を卒業してすぐに、柳田農学校に就職し、定年が終わる2年前まで働いた。

園芸（花・作物）について教えていた。給料は、昭和24（1949）年ごろで月給3096円。一般の人よりかなり良かった。

Iさん（重年、女性、65歳）

柳田では、当目小学校・柳田小学校・中学校に務めた。その後、3年間社会教育主事として役場で仕事をした。

柳田農業高校では、GさんやJさんのように農業のスキルを認められて教員になる人や当校を卒業したあとそのまま教師になった人もいたようだ。また、Iさんのような小・中学校教員は、村内の学校を移りながら仕事をする人もあったことが分かった。

また、給与水準がほかの賃金労働よりも良く、良い仕事と捉えられていたことも分かった。

2.3.3 その他学校職員としての雇用

柳田農業高校においては、教員のみならず、様々な業務をする職員がいた。農業高校では、授業に使う畑や牧場の世話をする技能用務員や助手、給食の用意をする煮炊きの労働者がいたことが聞き取りで分かった。

Kさん（野田、女性、81歳）

昭和38（1963）年、柳田農業高校卒業後、農高の技能用務員として働き始める。初め10年間は養豚部門担当で、その後マンネリ化防止とスキルアップのために10年ごとの部門異動を事務長に提案し、受け入れられたことから次の10年間は牛（乳業が主）部門に異動、最後の10年は果樹・素材園芸部門で働いた。

Lさん（石井、女性、72歳）

隣の家のお嫁さんが、一緒に給食の仕事をしないかと誘ってくれたことがきっかけで、柳田農業高等学校で給食の煮炊きの仕事を5年間ほどしていた。その後は、同じく柳田農高の牛舎の仕事で、牛の糞を集めたり、草をサイロに詰めて冬場のえさを作ったり、餌やりをしたりした。

Mさん（日詰脇、男性、71歳）

定年まで農高の助手として働いた。林業・畑・田んぼもやっていた。

Gさん（野田、男性、70歳）

能登高校では、寮の舎監を務めていた。能登高校、柳田分校は、農業、漁業、介護などの科があり、1学年5人くらいいる。

このように、柳田農業高校においては、様々な種類の仕事があり、旧柳田村の人々が雇われた。農業や林業を主産業とする旧柳田村にとって農業高校は、次世代の農家を育成する場であったといえ、農業の知識をもつ旧柳田村の人々が教育や施設を整備に携わることでその運営を支えてきたという経緯が垣間見える。

また、能登高校では校舎近くに寮があり寮の舎監を雇っていたことも分かった。教育機関では様々な業務内容の賃金労働が存在したのだ。

2.4 村内企業・商店

旧柳田村に立地する企業と商店でも賃金雇用は行われている。今回の調査では、旧柳田村内で商店を営んでいるBさんと商店で働いていた経験を持つLさん、旧柳田村内で建設業や米穀店

などを営む D さんに商店、企業での仕事内容や賃金雇用について聞くことができた。

B さん（野田、男性、81 歳）

昭和 42（1967）年には社長に就任した。当時はまだ商店街に金物屋や呉服店がなかったため、金物や呉服を扱っていた。現在は来店者が少なくなったため、カタログ商売をはじめ、四十九日の供え物なども売っている。

兄が起業した際に、女の人 1 人を雇用していた。社長になると女の人 2 人と男の人 1 人を雇用し、奥さんを合わせて 5 人で運営をした。雇用したのは、親戚のいとこや近所の子などであった。

L さん（石井、女性、72 歳）

（B さんの商店で）20 歳の時に子供を産むために休んだ期間も含めて 2 年ほど働いた。19 歳で嫁いってから初めての仕事だった。きっかけは B さんに雑貨店で働いてくれないかと声をかけられたことである。

B さんの商店は、百貨店として日用雑貨から酒や薬、たばこなどの幅広い商品を扱っている。B さんはこの商店で親戚や近所の人を数人雇っていたという。実際に、L さんは 19 歳で商店の近くに嫁いだ際に声をかけられて就職した経験を持つ。

D さん（野田、男性、69 歳）

コメ販売、建設業、その他にガソリンスタンドの経営、LP ガスの販売をしている。また、7、8 年ぐらい前まで裁縫工場をしていたのでそれを販売するための店も大阪にある（今は中国から仕入れている）。わが社で働く人には、若者もいる（20 代 2 人）。

米穀店は、今は（D さんの）奥さんがオーナー。「むらのもちや」は、平成 12（2000）年 9 月から 15 年ほどやっている。家で餅を作る習慣が薄れ、スーパーで餅を買おうとしても当時は県外のものばかりで自分の地域の餅が食べたいということがきっかけで、餅工場とおはぎを作った（地元の米使用）。働いているのは、50 代～70 代の 6、7 人のお母さん方で、朝の 5～6 時から昼頃までで終わる仕事なので、良い雇用ができたと思っている。

D さんには 2.2 で土建業の現況などについて伺いましたが、その他にも様々な事業に携わっており多くの話を聞くことができた。特に D さんの奥さんがオーナーを務める「むらのもちや」では、現在 50 代～70 代の旧柳田村の女性が賃金労働として餅の製造などを行っているということが分かった。D さんは、村内でお金を稼ぐことができ、かつ、無理のない勤務時間で働くことのできる雇用を創出したことに対して、満足していると語ってくれた。

このように、旧柳田村内の商店や企業では、旧柳田村の人々の賃金労働先として雇用を行ってきたことや雇用の創出の試みをする経営者がいることが分かった。

3. 出稼ぎ労働

「2. 賃金労働の概要」において、旧柳田村内の賃金労働の様相について述べたが、この賃金労働と深い関係を持つのが出稼ぎ労働である。旧柳田村では昭和 45（1970）年ごろに出稼ぎ者数が最も多く、同時に能登地域の出稼ぎ農家は、石川県全体の出稼ぎ農家の 98%を占めるほどであった（『柳田村史』1975：549-551）。この出稼ぎ農家の続出は、農家の収入減のほかに、出稼ぎと地場の賃金格差の問題において、出稼ぎが有利であることが原因として挙げられる。昭和 47（1972）年の旧柳田村では、農業臨時労働標準賃金が男子で 2000～2500 円、女子で 1500～2000 円で出稼ぎの一般的な賃金よりも少ない（『柳田村史』1975：552）。つまり、旧柳田村内の賃金労働では、農家の収入不足が解消できなかったということである。この出稼ぎ労働の存在は、聞き取りにおいても数多く聞くことができた。

N さん（笹川、男性、69 歳）

生産をしていた米等の値段が上がらないことによって出稼ぎが多くなった。出稼ぎ先は主に関西方面。春から秋は米を作り、冬に出た。最初は父が行き、帰ってきたがそのうち出稼ぎ先で生活基盤ができ、家族で移住するようになった。これによって人口が減少し、過疎が進んだ。

長男は跡を継げるが、食べていくには兄弟で分けることができなかったのも、次男からは出ていった。

O さん（石井、男性、65 歳）

柳田に 100 人いても残るのは 5 人くらいで、あとは柳田の外へ出て行ってしまう。4～10 月は田んぼで働いて、11 月～3 月は出稼ぎに行く人が多かった。

父は大阪に出稼ぎに行き、鉄道の線路の保線に携わっていた。夜の方が、給料がよく、日中の業務に合わせて夜も働いていた。人から良い仕事があると聞いてはその仕事先にいった。母は、加賀の方に行って早稲の稲刈りの仕事をしていた。能登は晩稲なので、その後自分の家の田んぼの稲刈りもしていた。

表 2 出稼ぎ日数（人数）毎年度二月調（単位：人）

	昭和 44（1969） 年度	昭和 45（1970） 年度	昭和 46（1971） 年度
30～60 日	51	14	5
61～120 日	329	76	48
121～180 日	349	616	525
180 日以上	119	206	287
計	848	912	865

出所：『柳田村史』1975：552 より筆者作成

このように、旧柳田村の農家は農閑期に出稼ぎに行っていたことが分かる。表 2 は、昭和 44（1969）年度から昭和 46（1971）年度の出稼ぎ日数別の出稼ぎ者数を示している。121 日～180 日間、つまり、4 か月から 5 か月ほどの出稼ぎをしている出稼ぎ労働者が最も多いことが分かる。出稼ぎ者数の合計は、昭和 45（1970）年にピークを迎えている。出稼ぎの日数は長期化している傾向にあり、長期間旧柳田村に帰ってこない人が増え、旧村内の人口減に拍車がかかっていることも読み取れる。

N さんによれば、さらに出稼ぎを重ねるうちに出稼ぎ先で新たな生活基盤ができ、そのまま出稼ぎ先に暮らし始める家族が出現し、過疎が進むことになったという。前述の通り、旧柳田村内に、農家の収入減を解消することができるほどの賃金労働先はなかったのである。

「2. 賃金労働の概要」で記したが、旧柳田村内の賃金労働の中でも、特にこの出稼ぎ労働者の増加に対応するために創出された賃金労働が工場労働である。旧柳田村は工場誘致を促進する条例を制定し、積極的に旧村内の賃金労働先を創出しようとしていたが、その背景には出稼ぎ労働者の増加があった。

『柳田村史』は、この出稼ぎ労働者の増加や過疎について、勿論柳田村としてその解決に努力しなければならぬ問題であり、また現に努力されつつあるであるが、石川県全体として解決しなければいけない問題をも含んでいる（『柳田村史』1975：553）とし、雇用創出の試みだけでは改善しない現状を指摘している。賃金労働はこのように出稼ぎ労働と深いかかわりを持っているのである。

4. 労働と生活

これまで、旧柳田村の賃金労働の概要や具体例について述べたが、賃金労働をしていた人々の生活はいったいどのようなものだったのだろうか。農業や林業は、自身の生活圏内にある土地や山を使って行う産業であり、生活と直結する仕事であるといえる。しかしながら、賃金労働は、雇用者と賃金契約を結び、労働する時間はその身を拘束されるものである。時に家事や育児といった生活との折り合いをつけなければならない。また、農業の傍ら工場労働する人々がいたように、本業との関係をも考えなければならないことがあるだろう。旧柳田村の人々の生活の中で賃金労働はどのような位置づけにあったのか。

今回の聞き取りでは、旧柳田村内外問わず、8 つの仕事を渡り歩いた L さんに賃金労働と生活の関係について詳しくお話を伺うことができた。

4.1 就職方法

L さんは、定年で退職するまでに 8 つの仕事を渡り歩いた。その就職方法は一様ではなかったという。

Lさん（石井、女性、72歳）

嫁いで初めての職場には、商店を経営している方に直接声をかけられたことがきっかけで就職した。2つ目の職場は、隣の家のお嫁さんから声をかけられた。その後転々とした工場の仕事では、募集のうわさや広報での募集を見聞きして、情報を得て就職した。最後定年まで働いた職場では、隣の家の方が退職した跡を継いで、就職した。

Lさんは、様々な方法で就職しているが、この聞き取りからは大きく2種類の就職方法があることが分かる。まず、1つ目は近隣の住民から話をもらうという方法である。Lさんがこの方法で就職した職場は、すべて旧柳田村内の職場（工場ではない）である。このことから、旧柳田村内の賃金労働は、村の人々のつながりによって支えられていることが分かる。この就職方法は、人口規模が小さく近隣とのつながりが強い旧柳田村のような農村によくみられる方法である。

2つ目は、募集情報を収集して就職するという方法である。工場労働では、特にこの方法が用いられていたようだ。いくつも工場を渡り歩いたLさんは、旧柳田村内だけでなく村外の工場にも就職した経験を持つ。そのような場合は募集の情報を能動的に探したという。工場労働は、たくさんの人手を要し、すべての雇用を一つの村内で賄うことは難しい。そのため、村内外から募集をするためにチラシなどが用いられた。これは、高度経済成長とともにもたらされた工場労働の近代的な就職方法であると考えられる。

4.2 農業、家事、育児との関係

Lさんの家庭では、農業をしておりLさんは出産をして育児もしていたが、そんな中でも賃金労働をしていたという。その当時の生活ぶりを伺った。

Lさん（石井、女性、72歳）

基本的に仕事が夕方に終わると、その後は畑仕事と稲作の作業を行った。農作業の間は、お義母さんが子供の世話や家事をしてくれた。子供が4歳になると保育所に入れ、送迎はお義母さんに頼んで、その分仕事にいきしんだ。

Lさんは、夕方まで仕事をした後、農作業をしていた。その間は義理の母が子供の世話や家事をしているので、安心して仕事や農作業ができたという。Lさんにお話を伺う中で、Lさんが、「動ける自分がやる」、「ほっておいても誰もやってくれない」という言葉を何度かおっしゃったのが印象的だった。賃金労働の傍ら、農作業もするというのはかなりの重労働であると考えられるが、収入をできるだけ多く得るためには、若い夫婦が働かなければならない状況があったことが分かった。家事、育児は義理の母が受け持つことで、Lさんが安心して仕事ができしたのは良いことだが、家族総出でできることをやるという最善を尽くした結果の分担であったともいえる。

4.3 考察

前述の賃金労働、出稼ぎ労働の概要とLさんに伺った就職方法や当時の生活を踏まえて、賃金

労働と生活について考察する。

賃金労働は、賃金労働のみを生業とするよりも農業や林業を主とする人々の収入を補うためのものだったといえる。一つの仕事に長く携わるというよりは、農業の傍らでできる仕事を転々とするということが多く、より収入が多くなるように遠方に出稼ぎに行く者もいた。出稼ぎ労働者の増加に伴い、出稼ぎ防止のために工場誘致がなされたが、就職方法は従来の近隣住民とのつながりによるものとは異なり、旧柳田村内のみならず村外の工場労働先の情報も手に入れることができ、Lさんのように旧柳田村外の工場で働く人も現れた。したがって根本の解決には至らなかったと考えられる。

賃金労働が雇用者との契約によって被雇用者を拘束する性質を持っているため、農業は賃金労働の勤務時間とは別に農作業をする時間を設けなければならなかった。2.1 工場労働でも述べたが、工場誘致によって旧柳田村に工場が立地し始めたばかりのころは、農繁期に仕事を長期間休んでしまう人もいた。しかしながら、近代的な賃金労働の形態が人々に浸透してくると、Lさんのように賃金労働を日中行った後に、農作業をするというような工夫が行われるようになったと考えられる。賃金労働と農作業を両立するのはかなりの重労働であり、家事や育児は家族の中で分担する必要がある。そこでLさんのように、義理の母に頼むというような工夫も生まれた。

Lさんの「動ける自分がやる」、「ほっておいても誰もやってくれない」という言葉に象徴されるように、人々は農業や林業だけでは不足する収入を得るために様々な工夫をもって、対応していたのである。そういった工夫の中に伴って、柳田村内の賃金労働は人々を助けるために、創出されてきたという経緯を持つと私は考える。

5. おわりに

私は今回の調査で、旧柳田村の豊かな自然や人々の温かさに感動した。賃金労働について調査する中で、残念ながら出稼ぎや進学、就職などによって人口が流出してきたという事実を知ることになったが、一方で、旧柳田村の今後を考え、諸問題に立ち向かう人々にも出会うことができた。現代では仕事に「生きがい」や「やりがい」を求める傾向にあるが、まず仕事は自身が生きていくためのものであるということ、また自分の暮らす地域にとって自身がこの地で働くことがどのような意味を持つのかということを考えなければならぬと痛感した。私は今後生きていくうえで、重要な考え方をこの調査で学ぶことができたと考えている。

最後に、お話を伺った方々には、私たち大学生を快く迎えてくださったことを心から感謝したい。